

京都大学教育研究振興財団助成事業  
成果報告書

平成26年11月10日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士課程1年

氏名 井口 暁

助成の種類	平成24年度 ・ 研究者交流支援 ・ 在外研究中期助成		
研究課題名	Luhmann政治理論に依拠した21世紀の民主的統治に関する社会学的研究		
受入機関	ドイツ連邦共和国、ハイデルベルク大学、ビーレフェルト大学		
渡航期間	平成24年 9月20日 ～ 平成24年12月20日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有( )		
会計報告	交付を受けた助成金額	750,000円	
	使用した助成金額	750,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃	194,000円
		国内移動費	73,000円
宿泊費・日当費		483,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 貴財団より助成をいただき、財政的な問題からこれまで実施できなかった海外調査を実現することができ、心より感謝申し上げます。他の助成とは違い難しい手続きがなく、複数の研究機関において調査・研究を行うことができ、非常に有意義な機会となりました。本当にどうもありがとうございました。 なお、本助成期間後のドイツ滞在の延長、また帰国後の諸般の事情から成果報告書の提出が大幅に遅れてしまったことについて心よりお詫び申し上げます。		

## 成果の概要／井口暁

### 1. 研究の背景と目的

私は、これまで、「民主制」ないし「民主的統治」の問題について、社会システム理論の視点から新しい見解を提起するドイツの社会学者ニクラス・ルーマンの政治システム理論に注目して研究を行なってきた。民主的統治は、従来、「人民による人民の統治」として把握されてきたが、ルーマンはそれを「政党政治、行政、公衆の間の二重の権力循環」として把握する。この議論の射程と意義を検討することで、21世紀の日本の民主的統治のあり方と可能性を展望することを目指した。とりわけ、価値の多元化が進み、人々の不都合と対立が顕在化する状況下においてなお「集団的拘束力のある決定」を産出する能力に政治の機能を見出す彼の議論に依拠することで、人々の価値と世界観がますます多様化する現代社会においてどの程度まで民主制が統治キャパシティーを有する／有しうるかを見極めることを目指した。

ルーマンの政治理論は、以上のように注目に値する現代的意義を有するにもかかわらず、日本ではこれまでその検討が遅れてきた。日本で入手できる文献も少ないのが現状である。また、ルーマンは生前に約 7000 枚ものメモカードを通じて膨大な仕事を成し遂げたことで知られるが、ルーマンの死後（1998年）、その公開をめぐる家族内で係争が起こり、長らく公開されるめどは立っていなかった。しかし、近年の判決によって正式にその公開が認められ、現在はルーマンの母校ビーレフェルト大学に保管され、編纂の作業が進められている。ルーマンの政治理論は、初期の1960年代から後期の90年までの間に強調点の変化を伴っており、それを読み解く手がかりがそうした資料に隠されている可能性が高い。

そこで私は、ルーマンの政治理論の一次資料および二次資料の収集を行うために、本助成に応募することに決めた。そして、運良く本助成の支援を賜るチャンスを得、ドイツでの在外研究（ビーレフェルト大学、ハイデルベルク大学）を実現することができた。

### 2. 研究成果

#### 1) 資料の収集

ビーレフェルト大学の K. P. Japp 氏のご協力の下、一次資料の編纂を担当しているチームに運良く連絡を取ることができた。残念ながら編纂の作業が完了していないため閲覧の制限がかけられているものも多かったが、一部の資料を拝見することができた。同氏と編纂チームの皆様にご心より感謝申し上げます。

#### 2) 講読授業への参加

ハイデルベルク大学では、ルーマンの著作の講読クラスに出席する機会を得た。規模は20名弱の少クラスで、学部生が大半、大学院生が数名いた。課題書は、ルーマンの講義録で

ある“Einführung in die Theorie der Gesellschaft”（『社会理論入門』）。日本ではその難解さゆえに多くの場合毛嫌いされ、社会学理論の授業でもほとんど深く扱われることのないルーマン理論について、ドイツの学部生が真剣かつ熱心に取り組んでいる光景を目の当たりにした。授業では、生徒が1～2章分をパワーポイントで解説した後、教員のイニシアティブの下ディスカッションが行われた。おそらく日本でこのテーマを扱ってもほとんど意見が出ないだろうが、この授業ではいつも時間いっぱいまで発言が絶えることはなかった。確かに発言する生徒は限られてくるが、先生がとても興味深い問いや疑問を発するので、いつも発言しない生徒も思わず手を上げて自分の考えを言いたくなるようだった。議論が深まるうちに、いつの間にかルーマン研究を専門とする私すら思いついたことのないような論点や疑問にたどり着いていることもあった。私も拙いドイツ語で何度か発言したが、あの場で交わされた議論のすべてを理解できるほどの語学力を持ちあわせていなかったのがとても悔しかった。改めて語学学習へのモチベーションが上がるとともに、ディスカッションを重んじるドイツの授業形式や、ディスカッションを誘発する教員のテクニックを体験することができ、とてもいい刺激になった。

### 3) 海外の研究者との意見交換

同授業をきっかけに、イラン出身のルーマン研究の博士課程の学生と知り合い、何度かお互いの研究テーマについて討論した。彼は、ルーマンの政治理論とメディア理論に依拠しながら、イランの政治体制における宗教の位置づけについて研究していた。私が感銘を受けたのは、彼が、ルーマン理論はイラン政治を読み解く上で有益な視点もあるけれど、ヨーロッパと中東の現実は違う部分もあるからすべてがあてはまるわけではない、その部分は自分のオリジナルな視点から補わないといけない、と話していたことだった。私はそれまで、ルーマン理論に対して批判的な眼差しを向ける努力も行なってはきたが、このように、ルーマンが自らの理論形成において知らず知らずのうちに自明視してしまった特殊ヨーロッパ的な現実について目を向けたことはあまりなかった。しかし、そうした理論のヨーロッパ出自性の影響は容易に想像できるし、日本の問題への応用可能性を見極めるため上でも、この論点を掘り下げることが不可欠だと感じるようになった。西洋出自理論の非西洋地域への応用を目指す研究者との意見交換は、今後の研究の方向性を考える上で重要なきっかけを与えてくれた。

### 3. 今後の課題

今回のドイツ滞在では、資料収集と海外の研究者との意見交換という当初の目的は一定程度達成できたと思う。今後は、ドイツで入手した資料と見聞きした素材を精査し、検討を進めることが課題となる。当財団の助成により日本国内だけでは遂行が困難な研究の重要な一歩を進めることができました。心より感謝申し上げます。